

1 研究の内容

(1) 主題について

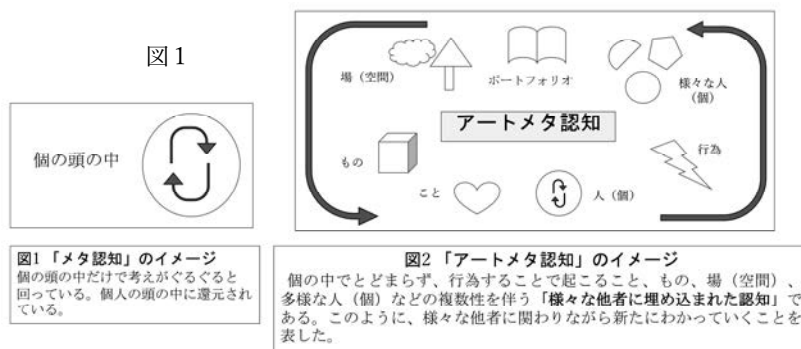
本部会は2019年度より、「『身体性を発揮し、アトリエ的な環境や他者（モノ・コト・場・人等）に関わり、つくりながら、未知未感の対象をわかっていく』わかり方」（小沼堀井, 2019）¹⁾と定義した「アートメタ認知」という仮説概念の実践的検証に努めてきた。図1は、他者の活

動が意識せずとも目に入る「アトリエ的な学習環境」²⁾における様々な他者との相互作用に「アートメタ認知」発揮されるという仮説を可視化したわけであるが、森田（2023）が指摘する「『芸術作品の制作』を頭の中の出来事ではなく、『物』を生み出す過程」, 「人と人々が複数性を保持して共生する公共世界に位置し、人と人をつなぎ-隔てる『介在』であること」³⁾という知見を重ね合わせることで、⁴⁾「アートメタ認知」の論理的土台を補強することにつながった。また、図1で汎用的な「メタ認知」をあえて対比して示したのは、「アートメタ認知」が様々な他者との相互作用の場において即時的、偶然的な直感が引き出す認知でもあることに着目する意図があるからだ。

造形活動は、材料やその形や色などに働きかけることから始まる側面と自分の表したいことを基に、これを実現していこうとする側面と、大きく二つに分けて捉えることができるが、いずれにせよ、子どもたち各々に様々な他者との相互作用を通して自分なりの判断があることには変わりない。造形活動は、帰納的に認知を積み重ねる操作の過程でも、演繹的あるいは跳躍的に状況が変容または収束することがあるのが特性である。この特性における子どもの試行錯誤に「アートメタ認知」が埋め込まれていると見立てると、プラグマティズムの観点から「アートメタ認知」を図画工作の学びの技法（道具）と位置付けることができるのではないかと考えた。これを補完する知見として、本田（宇都宮大学 2017）が「制作と鑑賞において、デューイは、「『経験としての芸術』が生成される要件を有機体と環境との相互作用により生じるリズムであるとした。」⁴⁾という分析に着目したい。本田は、「リズムとは、変化するもののなかにみられる秩序ある変動である。」とするデューイの定義を引用して、「つまり、リズムは芸術に内在する合理性であり、これも対象に感性的関わりを求める人間活動として、広義の芸術まで適応範囲を広げて捉えるべきものである。」⁵⁾としている。この「リズム」という概念は、多様な他者との相互作用を中心に想定していた「アートメタ認知」の内容に潤いを与えるものであり、後述する子どもの姿の読み取りや評価の観点をひらく予見を示唆している。

(2) 「学びをあむ」の“あみ目”のイメージ, “テクスチャ (Texture/質感・触感・織り方)”

本研究主題「学びをあむ」は「“あむ”という行為は、自分の思いをもとにしながら、それを形として創り出していくことであり、必用に応じてはぐしては編みなおせるという柔軟性を持っている。」としている。この主題で着目したことは、「あみ目」の具体的なイメージである。汎用的な理解としては、各教科・領域等の学習を通じた既習事項と子どもたちの身近な興味関心や問いから始まる「てつがく創造活動」の学びを“あむ”ということになるだろうが、それだけでは、いわゆる教科横断型学習の学びとの差異に乏しい。主として物理的な材料を扱う図画工作の学習では、必然的に材料の“テクスチャ (Texture/質感・触感・織り)”



との対話が活動の要となる。したがって「学びをあむ」の“あみ目”，しかもその“テクスチャ”に関心が向く。ここでの“テクスチャ”は「手ごたえ」と言い換えてもいい。プラグマティズムの観点に立つならば手で触ることが不可能でも、可視化された様相を知りたい。前述した「リズム」は“あみ目”から感じ取ることが可能であろう。図画工作の学習では言うまでもなく子ども達の行為や活動の中から読み取ることになる。そもそも、「毛糸でセーターを“あむ”」と「竹でカゴを“あむ”」では“テクスチャ”も視覚的な「リズム」も違う。たて糸とよこ糸を交差させる技法に着目すれば「はたを“おる”」という技法を連想し、完成品は布であり、“おり目”が現れてくる。したがって、「学びをあむ」のイメージ共有は難しいと考えた。

そこで本部会は、子どもたちが「アートメタ認知」を発揮する活動の中に現れる“あみ目”らしきものを“テクスチャ”を手がかりに見出していくという姿勢で研究主題をとらえ、“あみ目”が“よさや美しさ”を表出していることを想定した実践に取り組んできた。

(3) 「アートメタ認知」と評価

図画工作科の評価に関して、「教師の主観で決めているのでは？」という風評を多く耳にする。しかしながら、図画工作科の評価は、教科目標→題材の目標→題材の評価規準という手順を経て判断されている。本部会においても「アートメタ認知」の主旨を埋め込んだ指標を表1のようにまとめている。

表1

「アートメタ認知」で育成する資質・能力	現行教育課程がめざす資質・能力
材料との対話や行為等を通して造形的なイメージをつかむ。	知識及び技能
つくり、つくり変え、つくることを持続する自己調整力をもつ。	思考力・判断力・表現力等
他者との違いやよさを共感的に受けとめ創造性の更新に努める。	学びに向かう力、人間性等

おそらく、評価に際して、多くの評価資料（作品、学習カード、観察記録、活動画像・動画等々）を準備してもなお、評価規準に倣って最終的に判断するのは「教師の主観」というジレンマに悩むことが想定される。しかしながら、誤解を恐れずに結論するならば、図画工作の評価には「教師の主観」は重要である。少し刺激的な主張なので、エリオット・W・アイズナーが「教育的鑑識眼」⁶⁾の「鑑識眼」に関してワイン鑑定を例に説明しているのでその一部を引用して緊張を解きほぐしてみたい。

「ワインを味わうこと―その視覚的、臭覚的、味覚的な質を経験することを意味する―は、～ワインを口に入ればよいという問題ではない。それは気づくことの問題であり、気づくことには知覚力が必要なのである。知覚力とは、例えばワインに含まれるある味覚の質と他の質との関係を区別し、経験する能力のことである。」⁷⁾

ワインの鑑定に働く知覚力の引用は、形や色に基づいて対象を捉える「アートメタ認知」と親和性がある。それを「造形的な見方・考え方」と言い換えてもいい。形や色を更に掘り下げると、素材の材質感や行為に伴う音や振動、空間に漂う風や空気圧等々、身体全体で知覚する全てが「アートメタ認知」が対象とする様々な他者であり、それを通して世界を捉えることにつながってくる。また、アイズナーは、私的な行為である「鑑識眼」に公的側面をもたらす目利きの批評家の仕事として「教育批評」を示している。つまり、「教育的鑑識眼」と「教育批評」の機能を図画工作科の評価に埋め込めば、「教師の主観」という風評に動じることなく評価活動と向き合えるのではないかと考えるわけである。

アイズナーは、教師はすでに「教育的鑑識眼」を使っていると言っている。であるならば、「教師の主観」を磨き、目利きの批評家を目指し、定性的価値の有用性をまず、子ども達に伝えて社会に向けた未来投資としたい。定量的価値が尊重されがちな社会状況では、図画工作科の学びは多様性の象徴であるといえよう。

2 新たなあみ目を探る「ななめ糸」

(1) 「ななめ糸」としての異質な他者

「アートメタ認知」の源泉の一つに「後付け的思考」がある。

その後付け的思考について「試行錯誤の中で全く違うものとのつながりを見出すようになる。その関係の編み目を如何様にも作れる事を知っているからこそ、自分の考えや持っていた情報と異なるものに出会った

時に、寛容的になれる。何度でも方向転換が可能である事や、一方向ではない学びを知っていれば、既存の枠に捕われて思考停止状態に陥ることなく『案外こうしてみると上手くいくかもしれない』とやってみることができるのである。」（第79回教育実践指導研究会，発表要項，図画工作科より）と述べた。

そのような関係性の編み目を如何様にも創造していくことのおもしろさをもつ図画工作科特有の学びの探究は、本校の研究テーマ「学びをあむ」の前身となる研究であり、コロナ流行で改めて考えさせられた予定調和的な学びに一石を投じるものであった。そのような視点で試み新規開発してきたいくつかの題材は、既存の教科の「内容」をあむだけではなく、様々な異質な分野の間をあみ、さらに新たなあみ目を探っていくような「ななめ糸」であったとふり返る。

その「ななめ糸」をあむ上で欠かせないのは異質な他者の存在である。図画工作科では、学習分野アートの頃より、子どもの行為や表現に、アーティストはもちろん、美術館の学芸員、建築家、演劇家、認知心理学者など様々な他者に関わっていただき、子どもと異質な他者が出会う事に価値をおいてきた。そして、教師自らも子どもと異質な他者と一緒に表現し、一緒に授業を創るという「授業の共創」を試みてきた。

（２）「住まい」になってみる 2016年2学年

例えば、2016年に当時2年生の子どもたちと行なった「けんちく体操」を再考した「『住まい』になってみる」の授業である。最初に行なった「けんちく体操」では、関係者の方をゲストティーチャー（以下、GT と表記）に招き、各国の建築を自分の身体で表現し、構造を身体でわかることをねらいとして行なった。そこでは、建築を表面的に捉え「外」だけの視点になってしまっていることや子どもの問いや驚きなどの声が聴こえてこない事に違和感があり、授業を再構成することにした。コンセプトを練り直し、再構成後、



図2 「住まい」になってみる
ボリビアの住まいを表現する子ども達

研究授業として外部にも公開した。授業では、他者とともに「私」らしく表現し、建築の構造を身体で感じる事や、他者との対話をねらいとして、題材名を「建築」から「住まい」に変え「『住まい』になってみる」というテーマで行なった。「住まい」についての対話になると、ある子どもが「こういうところの生活って、ふつうの服じゃないんじゃない？」と言い、映し出されたボリビアの住まいに住まう人々の生活がどのようなものなのかを考えていた。またある子どもは、近くに写っていた靴から「住まう人」に視点がうつっていった。さらに、「だれが靴を脱いだのか？」「いや、中に人が居て、靴はこれからどこかにでかけようとしている。」「これは人が住む家じゃない。」「入り口があるから家だ。」「じゃあ、どういう家族が住んでいるのか？」「一人暮らしかも？」等々、子どもたちは内と外の関係に気がつき「住まい」の内に住まう人々の「生活」に着目するようになっていった。その対話後の子どもたちは、住まいだけではなく、住まいの内にあるものや住まう人も表現するようになった。教師は子どもたちの視点の広がりに合わせて、小松義夫の「地球生活記」を参考資料として配布し、各国の住まいにもつなげた。子どもたちは各国の住まいの差異に気がつき、その背景にあるものを皆で考えるようになり、各国の差異に注目するようになった。

（３）異質な他者との共振 - 1学年「実りの表現」より -

最近では、1年生を対象に子どもの生活の営みの中で表れた行為や子どもの声からテーマを設け、伝統文化に関するワークショップ（以下、WS と表記）を行い、様々な分野の方に関わっていただいている。本大学では、2020年度より「未来へつなぐ伝統芸能プロジェクト」を開始し、2021年度からは小学生を対象としたプログラムを開始した。

今年度は、日常の生活の中で子どもたちがダンボールでお面や体に装着する飾りを作ったり、野菜を育て、旬を味わったりした



図3 「実り表現」WS（10月）

事を題材に「実りの表現」というテーマを設けた。そこで、歌舞伎役者の市川九團次さんに入っただきながら「外郎売」の台詞に着目し、早口言葉にチャレンジした。また、実りの秋をテーマに描いた扇子を使って舞うなど、身体性に着目したワークショップ型の授業を展開してきた。子どもたちの関心は尽きず、九團次さんは普段どんな事をしているのか、歌舞伎を知りたいという声があり、本大学の神田由築先生をGTとして招き、歌舞伎の演目とともに、限取の意味についてもご教示いただいた。

その後、自分たちも限取をしたいという子どものリクエストに応え、本大学の大学生との共同授業を開催し、限取WSを行うこととなった。ここでも九團次さんが関わってくださり、子どもたちの前で実際に限取の実演をいただいた。子どもたちは、登場人物に変身する九團次さんを見て、本物に触れた時の喜びだけでなく、怖さや戸惑いなど、様々な感情に揺さぶられたようであった。子どもたちは、長年培ってきた知識や経験や技をもった他者の身体性に「からだまるごと」で感じ、揺さぶられ、周辺の様々な他者と共振していたのではないかとふり返る。

3 今後に向けて

「アートメタ認知」という仮説概念を本部会の研究主題に掲げ、コロナ禍を挟んで6年が経過した。そもそも、「メタ認知」という概念は、ある判断に対して、後から、上から客観的に振り返るという思考であることに鑑みると、そこに「アート」という色が付くと論理的には矛盾が生じる。しかし、この6年間の実践研究を通して「アートメタ認知」の妥当性や有用性が立ち上がってきた実感がある。それは、まず、生成AIの進化に代表される社会のデジタル化の影響をうけつつも、子ども達は絵の具とたわむれ、ねんどをこね回し、木材をのこぎりで切る行為に興味を示す実態に起因する。それはコロナ禍後、対面授業が安定的にするに従って徐々に必然的に回帰したように受けとめられる。一方で、表現主題の創造については、デジタル端末でモデルを検索する姿がみられるようになった。この傾向は、「アートメタ認知」の主旨である「未知未知の対象をわかっていく」という資質・能力と対立する姿と受け止められる課題である。子どもたちをとりまくデジタル視覚情報が進化する波は止めようもない。図画工作の学びそのものの問い直しが迫られている状況と受け止める必要があるであろう。この状況を踏まえつつ、今後も「アートメタ認知」の更新に努めなければならないと考えている。

(小沼・堀井)



図4 「実りの表現」から限取へ (11月)

【引用・参考文献】

- 1) NPO 法人お茶の水女子大学児童教育研究会. 2020. 第 82 回教育実習指導研究会要項. 東京.
- 2) 刑部育子・美馬のゆり. 2001. アトリエ的環境における学び: 木村実践に見るリフレクション. 『日本認知科学学会発表論文集』, 18, 234-235. 日本認知科学学会第 18 回大会.
- 3) 森田亜紀(2023)「芸術と共存の中動態」. 萌書房. 奈良.
- 4) , 5) 本田悟郎(2017)「ジョン・デューイの芸術論における人間活動としての作品生成と受容」
大学美術教育学 会『美術教育学研究』第 49 号, p. 372
- 6), 7) エリオット・W・A『啓発された眼 教育的鑑識眼と教育批評』(2024)池田史志・小松佳代子訳. 新曜社
NPO 法人お茶の水児童教育研究会. 2017. 学びをひらく -教師も子どもも変わるシティズンシップ教育-. 第 79 回教育実習指導研究会要項.
- 米山勇・高橋英久・田中元子, 他. 2011. けんちく体操. エクスナレッジムック.
- 森田伸子. 2021. 哲学からてつがくへ! 〈対話する子どもたちとともに〉. 勁草書房. pp150-159
- 小松義夫. 1999. 地球生活記 -世界ぐるりと家めぐり (写真記シリーズ) -. 福音館書店.